



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1983 精道教育促進協会 (声屋)三・三四五二芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

ご聖体 — 御父への永遠の感謝

日々の生活が絶えざる感謝の表われとなりますように

第二バチカン公会議では、ご聖体と教会の秘義の間の親密な関係が強調されました。ご聖体は教会の心です。事実ご聖体には、「教会の霊的富のすべて、すなわち、私たちの過ぎ越しであり、生命のパンであるキリスト自身が含まれている。キリストは自分の肉、聖霊によって生き、また生かす肉、によって人々に生命を与え、こうして、人々が自分自身と日々の労働と全ての被造物とを自分と共に捧げるよう招き導く。」(司祭の役割と養成に関する教令 5)

ご聖体はキリストの最良の贈り物です。その昔、花嫁である教会にささげ、今もなおささげ続けてくださっている贈り物なのです。キリスト信者の生活と教会の全行為の根であり、実りでもあります。ご聖体の秘義を通して、御父へのささげものとなるのはほかならぬキリストです。人間へのキリストの限らない愛を讃美するもの、それがご聖体なのです。イエズスは「自身を永遠の生命の糧としてお与えになりましたが、それだけでなく、ご聖体は主の聖霊をもお与えになりました。聖霊は、最高の贈り物であり、教会を生み、聖化する元になる御方、神秘における、兄弟的交わりの絆、多様な聖務と個々の役割りの造り主であり、守護者であります。

永遠に続く感謝

みなさんの集いがモットーとして掲げているように、ご聖体は、「共同体とその使命の、中心となるべき秘跡」です。ご聖体は聖なる三位一体の神が人類へおくる、計り知ること、筆舌に尽くすこともできないほどの愛の贈り物だからです。この贈り物のおかげで人類は罪による永遠の死から救われ、神の子として尊敬を得るところまで高められました。

そこで、ご聖体の秘跡は、御父に絶えず感謝を捧げる必要と義務をもとに、共同体を築くと言えます。そして、その共同体の中には、個人的、社会的生活の意味と価値すべてが含まれているのです。ご聖体という言葉には、感謝する、つまり、どこまでも謝意を表明するという意味がありますが、この感謝こそ、

まさにキリスト者の特徴となるべき態度であります。

この感謝に満ちた態度は、最近の日常生活にはあまり見当たらないように思われます。日々の生活には、不足するものが目立ち、また苦勞して求めたのに、期待や望みにそぐわないことが多々あります。神さまと、そして社会との関係をうち立てるに当たり、感謝は第一にして根本的な態度であるとは、とうてい言えなくなっているように思えます。

度々不平をならす人、自分に不足しているものにはかきをとめない人は、無限の愛の贈りものとしての自分の存在を知らず、また、自分の属する共同体内にある善き神の現存を受け入れることのできない人です。至聖なるご聖体は、感謝を捧げよ、謝意を表せよ、と教えます。ちょうど、メルキセデクが全能の神に「パンとぶどう酒を捧げた」、創世の書14・18)ように。注意して読めばわかるとおり、聖書には他のところにも、この感謝、贈与、奉獻という考えがよく出ています。

共同体を作る秘訣

実は、私たちと神、そして共同体との正しい関係が生まれるのは、ご聖体、つまり、この感謝の態度(ご聖体の倫理)からであります。ご聖体を祝すれば、相互の関係を律する秘訣を教わることが出来ます。「受けるよりも与えることに幸せ」(使徒行録20・35)を感じ、正義については愛を優先し、正当な権利として受けるべきものを受けても感謝する、このような態度を学ぶことができるのです。さらに、自分の計画や要求通りに獲得するよりもいっそう多くを、私たちの行為に報いて、神がお与えになることも教わっていきましょう。

「与える」倫理は聖体礼拝からくるわけですが、この倫理によると、たとえ、事欠く状態にいても困難に会っても神を信頼せよ、試練のさなかにあっても神は平安と忍耐を与え

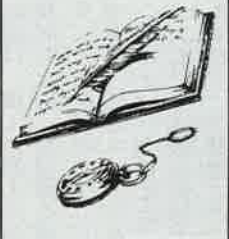
てください、と教えられます。事実、ご聖体のパンには、教会のあらゆる善と私たちが望みうる全てを含んでいます。秘跡のうちなるキリストと親しく交わるならば、現在の苦しい状態にあっても、恩寵と神の友情をただちに受け、また、最高の抱負を完全に実現できるという希望をもつこともできます。

ご聖体を愛する心があるなら、正しい価値基準を教わることが出来ます。私たちの意志やこの世の現実ではなくて、神のみ旨と超自然的の善を第一に大切なものと考えているようになります。物的、人間的な食べ物をはるかに超えるものへの飢え、霊的なことからの大切さを理解し、より高次の現実と価値に向かいたいという飢え、を感じるようになるようになります。

聖年とご聖体

贖いの聖年は、一層深い信心と御父への熱い感謝の心で、ご聖体の秘義の意味を深めよ、と招いています。聖三位一体の神が私たちに愛をそそいでくださることを、最高の形で示す秘跡、つまりご聖体が大勢の人々の心に場所を得ることが出来ますように。役に立たぬ失望や不平を捨てて、神、そして共同体に対し、より一層生き生きとして活発な感謝をあらわすことが出来ますように。愛と寛容、信頼、感謝に基づいた倫理の重要性をご聖体から教わることが出来ますように。日々の生活が絶えざる感謝の表われとなりますように。(エフェソ5・20とテサロニケ①5・18、②12) 神と共同体に対する私たちの態度が、つねに感謝にあふれたものでありますように。至聖なるご聖体は、たえざる回心を呼びかけています。聖年に当たり、生命の使信をよく聞きとり、無尽蔵とも言ふべき恩寵をすなおに受け入れ、兄弟愛を絆とした一致を実現させることが出来ますように。(一九八三・五・二〇)

大学の使命



中央アメリカ、ベリセ、ハイチへの私の旅行に際してこのメッセージを送り、教会と大学の特別なかわりについて皆様方と一緒に考えてみたいと思います。このメッセージは、今日の社会で大学が果たすべき、また欠くことのできない使命に対して、教会が重大な関心を寄せていることを示すものであります。いつにもまして現代は、人間の全人的発展について、特に留意しなければならぬ時代だからです。

ご承知のように、大学はヨーロッパで、しかも教会のふところから生まれました。教育、研究、文化の分野で教会が果たしてきた役割りが、自然に拡大した結果、大学が生まれたのでした。多くのカテドラルや修道院に源をもつさやかな学校として始まりましたが、より高度な学問のための学部やセンターなどは、はじめのうちは教会の支持をうけ、後には制度化されて、アカデミックな特典や自治を確保するようになりました。権威ある大学共同体が徐々に生まれたのです。例えば、ボローニア、パリ、オックスフォード、プラハ、クラコフ、サラマンカ、コインブラ等で、ヨーロッパ文化の発展に、賞讃に値する役目を果たしました。これらの大学からの刺激や貢献がなかったら、今日のヨーロッパ文化は誕生していなかったことでしょう。

ヨーロッパの活動がさきほど述べた地域に拡がっていくにつれ、教会は、新世界の必要に応えるために、大学や高等教育の学校創設を望みました。こうして、沢山の大学が創立されたのです。有名なところでは、サント・

ドミンゴ、リマ、メキシコ・シティ、スクレ、キトの大学とか、ボゴタのサベリオ大学、コルドバの大学、グアテマラの聖カルロス大学などがあります。これらの大学から、他の多くの大学が派生しました。ここでは、神学に限らず、哲学、文学、芸術、人文、医学、法学、数学、天文学、植物学の分野でも、高度の教育が行われていました。それと時を同じくして、大陸の主なる大学に有名な図書館が創設されました。

人類とその権利と自由を守るために

私がここで申し上げたいのは、当時を正当化したり、どの時代にもあった成功や困難をただ知ることだけではありません。私の狙いは、教会が幾世代にもわたり、大学を通して果たすべく努めてきた役割りを強調することであり、教会はそもそも初めから、聖なる学と世俗の学を育て、神のみわざを研究し、社会に貢献せんとしてきました。大学は、社会への奉仕に身を挺した、すぐれた教会人学者、教育者、法律や法制の専門家を養成してきました。つまり、大学は新大陸の至るところで、その社会の必要に応える有能な人材を育成してきたと言えます。

大学の役割りとは人類を守ること、その権利と自由を守ることである、という点を教会が忘れたことはありません。

あの偉大な司教、フランシスコ・デ・マロキン(1532-1603)の預言的言葉を思い出せば十分でしょう。有名なグアテマラの聖カルロス大学が創立される百年も前に、この司教は大学のキリスト

教的、人間的使命を宣言しています。大学の創設に資することならでできる限りのことをし、そのために遺産まで残しました。

大学とは、聖カルロスにとって、聖なる学とその他の学の進歩、それに人権擁護にうち込むべき機関でありました。教会が絶えず喚起したこの精神のおかげで、ラテン・アメリカの人々の主体性確立に役立つ、新文化が花咲いたのです。ラテン・アメリカの諸国家を形成し、自治権や文化的素質を確立し、この大陸に住む人々の共同体精神をいつも支えてきた無数の男女が、以上のような大学から輩出したのでした。

真理の探究

お国の大学の歴史は、長い間教会の歴史と一体となってきたと言えましょう。たとえ、政治その他の状況が変化して、両者間の絆が断たれ、相互理解に欠けるとしても、大学と教会の間には、真に性質を同じくするものがあることを認める必要があります。

実際に、大学も教会も、それぞれ独自の方法で、真理の探究、精神の発展、普遍的な価値追求、人類の理解と全人的発展、宇宙の神秘探究などに、専念してきました。一言で言えば、大学も教会も共に、無私の心で、最高の倫理的知的熱望に応えようと努力しているのです。人間が神の似姿に創られ、唯一無二の尊厳を備えていると教会は教えます。この尊厳を、あらゆる脅迫から守らねばなりません。とりわけ、個別的に、集団的に、人間の肉体と精神両面の破壊を目論む攻撃から守らなければならぬのです。

教会は特に、今日の大学生諸君に語りかけています。共に人類を守ろうではないか、今や人間の尊厳も名誉もおそろしくおびやかされているから、と。大学はその使命からみて、他利的で自由な制度ですが、現代社会において、教会と提携して人間そのものを守りうる

数少ない制度の一つであると思われれます。人間は無二の尊厳を有しており、自ら尊敬されるに値するといふだけで、ただひたすら、人間を守ることのできる、そういう制度が大学であります。

これこそ教会が教える優れたヒューマニズムですが、これこそ、皆さまがた大学生、教育者の方々の崇高かつ焦眉の使命であると思えます。ですから、授業、情報、対話など、正当な手段をすべて用いて、皆さまの仕事にヒューマニスティックな使命と呼べるようにしてください。人間が人間の敵となるような事態をさける唯一の文明、愛の文明、の立役者になっていただきたいのです。(…)

善意の人ならだれもが、この道徳的霊的人間観を共有するよう招かれています。困難にうち勝ち、不条理な戦争と同胞殺人劇を避けたいのなら、このような人間観を全力で奨励しなければなりません。それができなければ、人間が人間を食いものにし、利益やイデオロギーを追い求める残忍なゲームに身を任せることになりましょう。

この点についてはだれも無関心ではいられません。無私の心で人間を守り、人類の真の進歩を促進しようとするれば、相互のちがいを克服し、より高度の学識を党派争いから切り離さねばならない、つまり、真理と正義を心に刻みつけなければならぬのです。

絶対者、超越者から目をそむけてしまうなら、大学は自己の使命を裏切ることになります。そんなことをすれば、大学はすべての現実と真理の探究を断念し、人間とは何かを研究もせず、前もって勝手に決めてしまうはめにおちいります。人間が最も熱心に望んでいるものこそ、実は、真・善・美を知ることであり、人知を越えた運命に希望を抱くことなのです。従って、大学は、真理と正義の証人となり、国民の道徳的な良心を反映するものでなくてはなりません。(…)(二・七)

説教・講話・書簡等の抄訳

悪に背を向け

キリストの招きへ

——シンドスのオープンニング・ミサで——

(…)善と悪の対立関係が人類の歴史に入り込んだ結果、人間の心のもとの状態、つまり罪なき状態が破壊されてしまいました。「人間は神によって義の中におかれたが、悪霊に誘われて、歴史の初めから、自由を乱用し、自分の完成を神のほかに求めた。」

それ以来「人間の全生活は、個人的にも団体としても、善と悪、光と闇の間における劇的な戦いとして現われる。」(…)「実に罪は人間そのものを弱くし、人間をその完成から遠ざける。」(第二バチカン公会議『現代世界憲章』13)ところで、この善悪の対立関係は神の王国建設にあたって主な障害となります。それだけでなく、人類史の中で、また人間生活の各分野で、言いかえれば個人生活と社会生活の中で、真理と愛の王国を建設するに当たり邪魔になるのがこの善悪の対立です。

だからキリストは、使命を果たすため神の国が近づいたと告げたとき、「メタノイエ」、つまり、心を変えよ、と呼ばれたのです。キリストは神との和解と回心を呼びかけました。ところで、最高善は神ですから、悪に背を向けて善に向かえという命は、つまるところ悪に背を向けて神に向かえ、ということになり、また、キリストの招きですから、人間の力で実現できるはずだ、ということになります。私たちは自らすすんで救いの恩寵を受けることができ、恩寵があれば人間の心の奥底にある望みをも変えることができます。従って、このキリストの呼びかけのなかに最初の福音の光をみつけることができるのです。そこに

こそ、悪にうちかつ善、罪にうち勝つ光をかいま見ることが出来ます。そして、これこそ、キリストが十字架と復活を通して世の終わりにまで約束してくださった点なのです。

悪にうちかつ

最初の週には、二十世紀の最後に働く教会

私たちは今、この聖なる地で、聖体祭儀をとりおこなうところです。ここには私たちの兄弟姉妹が大勢眠っておられます。みなさんがたにとって、とくに親しい間柄の方々、ご親戚の方々、またみなさんに生命を与えたご両親が眠っておられることでしょう。こうしておられますと、それらの方々「死」によって突然中断されたおしゃべりの続きを望んで過去の世界からぬけだしてこようと思えます。そして今この墓地で行なわれているように、世界中のカトリック墓地では、諸聖人の祝日にあたり、このようになすばらしい集いがとり行なわれるのです。そこで生きている人びとは亡くなった方々と出会い、死でさえも分かつことのできなかつた通功(交わり)の絆を強めます。

これは現実の交わりであって、決して錯覚などではありません。キリストは御みずから人間の死を体験し、死にうち勝つことによ

の牧者として、この根本的な福音の呼びかけに集中しなければなりません。この呼びかけはあらゆる時代のあらゆる人々への呼びかけですから、私たちの時代の人々への呼びかけです。一人ひとりの人間にとって、救いと解放をもたらす力であります。そして、このよきな力はキリストのご死去とご復活のみのりとして、教会に与えられました。キリストは、復活の当日、エルサレムの高間に集う弟子たちにおおせになりました。「聖霊をうけなさい。あなたたちがゆるせば、だれの罪でもゆるされ、ゆるさないうちで留めておけば、ゆるされないまま残る。」(ヨハネ20・22・23)

使徒たちの後継者である私たちには、人間と神との和解の秘義をおしすすめるという重

い責任があります。なかでも特に、実際に和解を成立させてくれる秘跡に対して重大な責任を負っているのです。ふたたび、黙示録を読んでみましょう。ここでは「子羊の血によって」勝ち得ることのできる勝利が告げられています。その勝利のうち「神の勝利の力と国と救い主の權威とが現われた。」(12・10) 神との和解が実現する秘跡において、罪を告白して自らを責めま

す。そうして、私たちが日夜さいなむ告発者から、いわば力をうばいとります。事実、ゆるしの秘跡のなかで、神のみに痛み悔の心で自らの罪を責め、罪を告白するとき、子羊の血に洗われて、「勝利」を得ることができるのです。(…)一九八三・九・二十九

かからできえも、勝利の賛歌、よろこびのアレルヤを、天にも届けとばかりに歌います。死せる人々は、その死において(…)イエズスと共に葬られたのち、キリストと共に生きる。(ローマ6・4参照) 試験の時は終わりました。そして今、報いを待ちうけています。ですから、かたわらを去った死者をいたみ、悲しむとは言え、彼らがすでに故郷で平和を満喫するさまを思い、私たちは喜ぶのです。ただし、彼らも人間固有のもろさをもっているはずですから、祈りで、心のこもった助けの手を差しのべる義務があります。本



死者との通功(交わり)

助けの手を差しのべる義務がある

礼の中で私たちの元まで届いてくるのです。洗礼を受けることによってなにか起こるのかを説明して、聖パウロは次のように書き記しています。「もし私たちがキリストと共に死んだのなら、また彼と共に生きる、と信じる。」(ローマ6・8)

この言葉に力づけられた私たちは、墓のな

不変の教え

技術と倫理

生産と利益の追求をふくめ、
すべてが人間の尊厳に関わっている

1 西ヨーロッパ、北米、日本の政治、経済分野の代表のみなさまにお目にかかれて嬉しく思います。私にとっては、特に思索するよい機会となりました。と言いますのも、能力と専門的知識と経験とに富む方々の減少にならぬよう集まりをみなさんはもっていらっしゃるからです。政治、経済、社会学の分野での知識がここに集結されているわけですから、みなさまは大変威力ある手段を手にしておられます。しかし、もしこの力に峻烈な責任感が伴わないとすれば、道徳的にも正しくこの力を活用することはできませんでしょう。

みなさまの技術的研究に口をはさむつもりは毛頭ありません。ただ、お仕事の主題が人間と極めて緊密に結びついており、みなさまは科学技術と倫理との境界領域に絶えず立たされていますから、東西関係、国際協力、中東の和平探究、軍備制限など、その他いろいろの問題に関するみなさまのお仕事について、大変深い関心があるのです。

みなさまの活動の倫理的責任は、みなさまの出身を考えれば、重いことがわかります。富める地域の出身であるみなさま方は、人々を励まして国際間連帯を推進する責任があるのです。私の前任者パウロ六世が回勅『ポプロールム・プログレッシオ』で述べられたように、「この責任は、まず恵まれた条件にある諸国が負わねばなりません。」(44)

くり返し申します。人間の連帯と政治、特に国際的な連帯と政治について語る場合には、ヨハネ二十三世の次の言葉を忘れるわけには

ゆきません。「個々の人間関係を律する道徳法は、同時に、政治共同体間の互いの関係をも規正するものである。」『地上に平和』第3部) 国際的な連帯とは、諸国民間の関係ばかりでなく、政府間レベルでの関係や、多国籍企業レベルでの関係をも含めて、国家間の関係のあらゆる手段に適用されるものであります。どの分野をとりあげても、倫理道徳の要請を無視することはできません。こうした倫理道徳的要請は科学技術の多くの要素に関係しますし、企業の生産性や利益にも関わってきます。それは私が『働くことについて』(17参照)で言及した通りであります。要約すれば、これらの活動はすべて人間一人ひとりの生命や諸々の共同体のためになるものでなければなりません。生命の法則、生命の誕生、生命の尊厳、とくに貧しい人々の生命を侵害するものであってはならないのです。

資源の適正な分配

2 この数日間、みなさま方は開発計画を検討し、二つの努力が要求されていることを強調しておられます。すなわち、一方では貧しい国々の努力であって、みずからの手で自国の開発を確保すること。他方、裕福な国々に要求されるのは、発展途上地域の人々が最低限必要としているものを援助するため、また、資源のより適正な分配を促進するための経済と貿易の諸条件を作り上げる努力であります。けれどもここで疑問に思うところがあるので、みなさまにお尋ねいたします。発展第三期の最初の三分の一が終わった段階で、南北

関係の情勢が、六〇年代の初めに比べて一層緊迫しているのはなぜでしょうか。貧富の較差が絶えず広がっていくのはなぜなのでしょう。その答えとして、七〇年代のエネルギー危機を指摘することができましょう。あの危機のため、先進国はおびただしい数の社会問題に直面することとなりました。また、この答えを補うものとして、『ポプロールム・プログレッシオ』の主要テーマの一つ、『人格の全体的発展』にしかるべき配慮がなされなかつたことをあげようと思えます。

物質面の発展ばかりを追求しても幻影を追うにすぎません。生産と利益の追求をふくめ、すべてが人間の尊厳に関わっています。この尊厳を侵せば、発展のための努力は力を失ってしまうのです。反対に、抑圧、搾取、劣悪な依存関係から人々を守る社会的、文化的、精神的諸条件を作るなら、それこそ開発プロジェクトの成功を保障するものとなるでしょう。「要するに、自分をより価値のある存在とするために、もっと多くのことを行ない、知り、かつ所有す」べく、『ポプロールム・プログレッシオ』6) 努めなければならぬという事です。

平和な関係

加えて、民族間の平和な関係についても、同様に関心をもっておられます。平和的關係と開発とは、一見考えられるよりはるかに密接に結びついていますが、それは、私が先ほど喚起した倫理的真理が、真の平和の根本をなしているからであります。たしかに、交渉にあたる当事者の辛抱強い努力や、より弱いレベルでの力の均衡を守るための技術的な解決を十分に研究すること、などを無視することはできません。多くの機会を捕えて、私は以上の点の大切さを強調してまいりました。年頭にあたってのメッセージでは、安全を確保する手段として、もっぱら対話の重要性を

説きました。もちろん真の対話であるためには、誠意にみち誠実でなければならず、偽りや相手をあざむくような意図があってはなりません。(…)

ご承知のように、みなさんの専門分野では、技術と倫理を切り離すことはできません。倫理の裏付けがなければ、政治活動は、公益を守れないばかりか、人間による人間の搾取という耐え難くも嫌悪すべきものとなってしまいます。

ですから、みなさんが国際関係の道徳面を無視したり犯したりすることなく、善意の心で調査研究に尽力してくださるようお願い致します。何事もすべて人類に役立てるためになさってくださいますように。

人類の創造主、生命の主である神が、みなさん方の貢献を効果あるものとしてくださいますように、そして、みなさん方の心の中に平和を植えてくださいますように。

(一九八三・四・十八)

昭和59年度(1月~12月)

年間継続購読のお知らせ

月刊紙「教皇様の声」を毎月お手もとへお送りする便利な年間購読をおすすめいたします。

■教会でまとめてお申込みの場合

教会で募集している場合、まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は720円です。ご担当者宛にお申込み下さい。

■個人で直接お申込みの場合

振替用紙に所定事項をご記入の上、お近くの郵便局よりお申込み下さい。毎月ご自宅へ直接お送り致します。年間購読料は720円(送料(1年分)は下記ようになります。

- 1部 720円 ●2~4部 840円 ●5~8部 2,040円 ●9~19部 2,880円 ●20部以上 無料

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月 十日発行。定価 一部六十円送料六十円。一年予約七百二十円送料七百二十円。二十部以上の一括購入なら送料不要。

郵便振替 神戸 3-72393